

山居乱信

1

外が暗くなつて室の中に電燈がついた
つやつやしたガラス窓に僕の顔が映つた
「あら 電話だわ」
家の者が立ち上つた
その時両手を上にふりあげて
電燈の傘に当つた
はげしくゆれる光
ガラス窓では手が
ひらひらと二匹の蝶のやうに動いた

2

針金細工の二つの人形のやうにからだをからませて
白昼のベッドの上を転々する
「もうどうなつてもいい」
折れ曲りながらゆすつてゐる女の言葉
まるで現実の人間のやうに感じられる
ぜんまい仕掛で動く人形のはづなのに
僕が女の口をふさいで女の言葉をとめようとしてゐた
西安のサーカスで見た箱男を思ひ出して
無理に女のからだをゆがめた
白い肌のあの男は舞台の小さい箱の中に
足を折り背を伏せ首を自らの肉体にさしこんで
自分で蓋を閉めて消えた
高い天井の下のベッドの上であるのに
僕にはあの中に消失した箱男のおそろしさがおそつて来る
しかしフィナーレには彼は現れた
僕は女の耳にささやいた
「どうなつてもよくはない
どうにかしなければならぬ
僕たちは駄目になつてしまふかもしれない」
解けない大きな智恵の輪みたいに
ころがつてゐるにすぎないもつれた針金人形
解かう
どうにかして

3

北上する新幹線が

北上川の鉄橋を渡つてゐる
週刊誌のカラー写真に見入る
航空写真なので細い白い線の束が
緑の木立の中をえぐつて見える
何十年前か前僕は暗闇の時間にあの川を越して南下する汽車に乗つてゐた
春先きのつめたい空気の中
轟音と汽車の揺れ具合で何処にゐるかはわかつてゐた
連結器の傍のデツキの上から
ポケットの小さい包みを放り出した
橋梁に当つてコツツと音がしたが
あつてなくすべて終つた
ああ 思ひ出のすべて
一人の少女を愛し 死を送り
残された形身 小さな物を投げ捨ててしまつた
カラー写真に見入つてゐるうちに
自分が新幹線に乗つてゐるやうに考へはじめた
北上川の鉄橋を南下してゐて
僕はポケットから小さい包みを取り出した
あの時のやうに
デツキの上から投げ捨てようと考えてゐた
年齢を重ねて分別もあるからだらうか
ためらつてゐる自分に気付く
新幹線の構造は嚴重なものだ
硬質のガラスで外界と隔離されてゐる
週刊誌から目を離して自分につぶやく
「あの時が現在なら
投げることはできなかつた
少女の思ひ出も消えなしであるわけだ」
しづかにポケットの煙草をさぐり
椅子に身を沈めた

4

室全体が傾いてゐる感じだつた
しばらくたつた今でも
ガラス窓の中でまだかすかに電燈はゆれてゐた
「あなたにお電話」
家の者の声は背面から刺すやうに
微笑は外の闇を背景にして映つた

